



富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン

31 キキョウ

職藝学院

教授 渡邊 美保子

キキョウは秋の七草のひとつで、万葉の時代から日本人に親しまれてきた丈夫な宿根草です。秋の花のイメージがありますが、6月中旬になると鮮やかな青紫色の花が咲き始め10月初旬まで咲いています。日当たりが良く、腐葉土をすきこんだ水はけの良い所を好みます。

キキョウは草丈が100cm前後で、根元から何本も花茎を垂直に伸ばします。6月になると花茎の先端に小さな緑色のつぼみが上を向いて並びます。そして一日ごとに淡紫に色づきながらふくらんでゆきます。つぼみが濃い紫色の五角形の紙風船のようになると五等分に割れて5枚の花びらになります。キキョウは、雌しべの先端に同じ花の花粉が付かないような仕組みを持っています。薄青い棒のような雌しべを取り囲むように5本の雄しべがぴったりとくっついたまま花を開きます。すぐに雄しべには白い粉がふいてきます。これが花粉です。そして雌しべの周りに花粉をまわりつかせると、雄しべは花びら側に90度ほど曲がりしおれてゆきます(写真1)。雌しべの周りについた花粉が無くなると雌しべの先が5つに割れて、くるとそり返り白い小さな花が開いたようになります(写真2)。この時に、雌しべの先端で他の花の花粉を受け入れます。

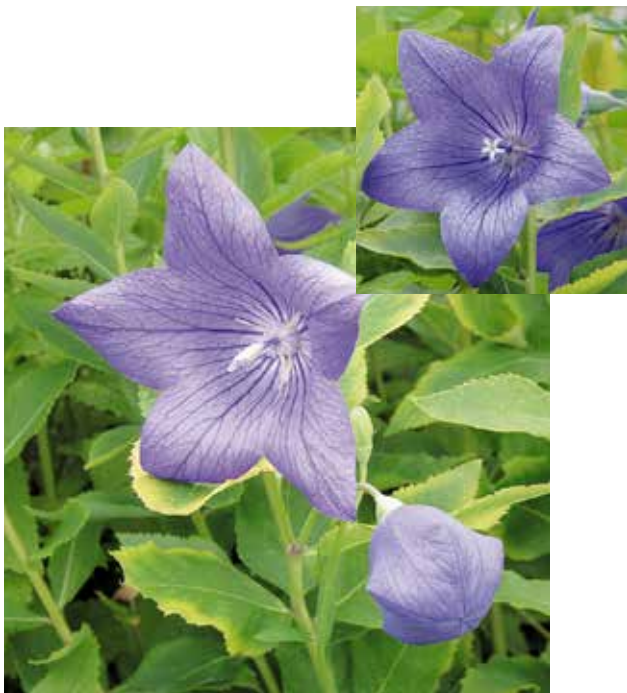


写真1 キキョウの雄しべの花粉が雌しべの花柱につき、雄しべはしおれてゆく。開花2日後。(下段)

写真2 キキョウの雌しべの柱頭が割れて5枚の花びらのように見える。開花して4日目。(右上段)

キキョウの根はゴボウのように太く、たくさんの養分を蓄えているためでしょうか、6月初旬から10月初旬の長い間、それぞれの茎の葉の付け根から次から次とつぼみを生み出します。それに比べて、キキョウの花が咲いているのは4~5日です。花が終わると紫色だった花びらは、まるで色を吸い取られるように白くなってゆき、ふくらんだ緑の実からしわくちやの紙がぶらさがっているようになります。あれほど清らかでつややかな花を咲かせていたのに思いもよらない姿に変わります。7月中旬になると、つぼみは次々とポンと割れて忙しそうに咲き進みますが、開花期間が短いため、しおれた花もあっという間に増えてゆきます。花付きと見栄えを良くしたい場合は、花がしおれてきたら緑の実をぼきぼきと摘み取ります。毎朝の日課になるぐらい忙しくなります。

組み合わせは、8月初旬から開花が重なるオミナエシの黄色の花との相性がぴったりです(写真3)。キキョウとオミナエシは、山の草刈り場などに自生していたとのことですが、現在ではそのような場所がほとんど無くなり、絶滅危惧種に指定されています。自然界の組み合わせを庭に取り入れてみませんか。



写真3 キキョウとオミナエシ。8月中旬。7月中旬に茎を20cmほど切り戻すと2番花が咲く。